

# 玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第11回

## 福岡表警聞懐旧談 (六)

明治九年末、箱田六輔、頭山満、進藤喜平太らがいっせいに捕縛される。彼らが獄中にある間、西南戦争、その一面面としての「福岡の変」が進行する。

十年三月十六日、福岡士族川越庸太郎、吉田真太郎が薩軍への特使として派遣される。福岡士族決起の意思を伝えるためである。これにより、越知彦四郎らは薩軍の敗走を知っても、計画を後戻りさせることはできなくなった。川越、吉田は官軍の警戒線を越えて薩軍本営を目指すので、ひとたび行けば生還は期していない。

川越は九月二十四日、鹿兒島城山の総攻撃の際、西郷隆盛、桐野利秋の死を知った後、二十四歳九ヶ月で戦死した。吉田は疲勞困憊、西郷ら本営の可愛岳越えに取り残され、官軍に捕えられた。後に、友人川越の跡を継ぎ、川越余代と名乗った。向陽社で一派を率い、平岡浩太郎派、箱田六輔派と三派鼎立の状態にあったという説もある。玄洋

せられ、巡査列に擁護せられて入檻す。

是即ち明治九年十二月三十一日の事なりとす。夫より七、八日を経て頭山満、進藤喜平太、阿部武三郎、松浦愚、大倉周之介、高田芳太郎、山田栄三郎、林斧助等の一累も相次で捕縛繋囚せられけり。是等の銜者は脆くも拳兵以前に於て拘引せられ哀れ実戦場に於て各自の技能を發展するに由なく、空敷く檻圍の衷に呻吟し、越知、武部等が拳兵の顛末を洩聞くなし。各々牙を噛みて憤慨之涙に咽び、その星月を経過せしことと推知せらるべきなり。

社とは対立する陣営の指導者だった吉田駒次郎(福岡県会議長)の実弟。

◇ 明治丁丑 ◇

福岡表警聞懐旧談 上

清津野生編述

第三回(続き)

### 第三回(続き)

処が寺田(寺内が正しい)警部出て慇懃に款接し、足下(箱田、頭山の同志宮川太一郎)へは目今指して取調るの用向もなし。若し用向あらば呼出す可し。本日は引取りて然らん。併し相成丈け在宅して当分他出なき様ありたしとの言なりしかば、宮川は家に帰りて節季年迫にも際せしかば送旧迎新の用意におさおさ着手しかり、之より三日程を経て師走の臘日に及ぶ。恰も其の知友も来り訪ひしかば共に歳を送らんと臘酒を酌み交し居たりけり。処に突然戸口より数名の巡查闖入し、宮川に向ひ御用有之拘引すとの命令を伝ふにぞ、宮川は毫も動ぜず、従容として其座に縛

て、その弾薬を奪ふ。又何か政府の密命を受けて帰県なし居たる二、三の官吏を捕縛して、その罪を糾鞠してその口供書を按じ、陸軍大将西郷氏は桐野、篠原の諸將と共に数万の大兵を率ゐて、政府へ向け尋問の次第ありとて熊本を通り、東上進発、その期ありとの実以て容易ならざる事の警報を齎し告げたり。

去れば、越知、武部の一累は十一学舎に密集して議すらく、未だ西郷氏より起るべきの時機に非ず。恐らくは少壮士が一何事事に激して暴発せしなる可く、暫く時を見合す可し。去りながら、果して西郷氏にして起りなば前約を違へず、我党も亦応分の兵を挙げて以て応援を表すべきは無論なるも、尚尚同地方の事状は探偵せざる可からずとて、同表に遊方なせし松本俊之助を指名し、同志者が総代として先づ以て熊本迄赴かしむる事とはなりたり。

松本は奮激してその指揮に随ひ、即座に山下虎走なる悍傑の一人を伴ひ、二人挽の人力車を備ひ、即ち出發急行高瀬宿迄抵りしに、同宿に於て恰も鹿兒島県令大山綱良よりの専使今藤大属一累十七、八名併(一并)に薩人福島某の一行に遭遇して、西郷陸軍大将が二万の大兵を引率し、政府へ向

け尋問の次第あり、其出京の旨趣を、大山県令より沿道の鎮台、各府県庁への通知書面、及警視中原尚雄、安楽某等が口供書、活版刷りの一束を貰ひ受けたるにより、松本は即ちその緊要の書類を同伴せる山下虎走到に附して急行帰報せしめ、其身は直に進んで熊本に抵りしに、其時、熊本城は籠城に決せしと見へ、城下の市街は悉く焼払はれ、全市焦土と打変せしのみならず、城廓の天主櫓も亦延焼して其火未だ消へず、黒烟天に立ち昇りたり。

且つや薩軍の先鋒は城下に迫り、川尻に於て戦端開始され居たりとの模様なりしかば、松本は曾て面識ある池辺吉十郎が横島村の自宅を訪ひ、目下の事情を尋問せしに、池辺は懇に松本に款接して、その事実を説き、薩勢は既に川尻地方に於て一戦し、兵を城南金比羅山へ移し、昼夜なく其嶺上より城内を砲撃せり。又熊本鎮台司令長官谷少将は樺山、児玉等の將校と籠城に決し、日々夜々の防戦激闘、見らるる如く全市は焼払はれ、居民は悉く所在の山野に避難したりと物語り、池辺は同志を集合して薩軍を応援せんとすの準備中なりしその拳動を、他よりも推察せられたり。

松本は池辺を出でて之よ

り進んで川尻の薩軍に投じ、其本部に詣りて同志の意を致さんことを思ひ、台兵の警備嚴肅の下を潜みて川尻地方へ向け出掛りしも奈何せん、往來硬(梗)塞して通行す可き由なかりしかば、万己みなく(やむなく)その思を翻へして昼夜兼行帰報の途に就きにけり。

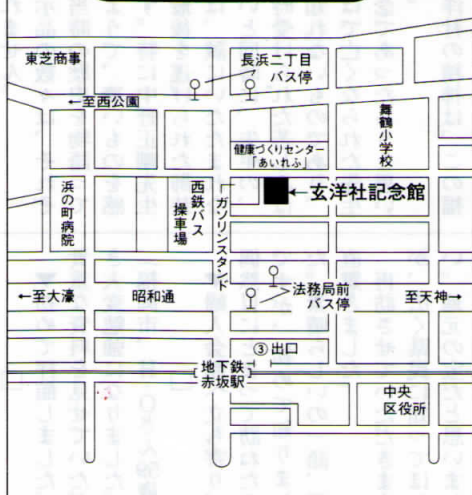
頓てその帰途、南関に於て、嚮ふより福岡官所の隊(＊)を吉松少佐の引率して進軍せしに遭遇す。松本はその途中に於て少佐に面接して熊本顛末を一報せしなり。跡にて聞けば、吉松少佐はその翌日、植木の激戦に於て討死し、又追討の大号令渙発すと同時に、西郷以下の官爵褫奪、彼鹿兒島の専役(使カ)一行は久留米表に於て拘引捕拿せられしとの警報を耳にせしなり。

四聯隊とあれど、此時は福岡には廿四聯隊なるものなし。依つて福岡官所と訂正して記入す。(石瀧追記)指揮系統は、熊本鎮台↓小倉分営↓福岡官所となる)

松本はその日の夜半、福岡に帰着なして、熊本にて聞及びたる顛末を詳細に同志中に報道せし事を知らる可し。依つて越知以下の一累は十一学舎に打集りて詳論の結果、川越庸太郎、吉田新太郎の両名を指名し、福岡同志士が総代、即ち応援の専使として豊後路を跋涉、薩軍の本営指して赴かしめたり。

両士は同志と荒津山に訣飲し頭髮は逆立て帽を衝き意気揚々易水の詩を歌ひてその途に就けり。是即ち三月十六日薄暮の事なりしなり。

### 玄洋社記念館案内図



＊(頭注)原文には廿